
月村と神凧と夜の一族と 番外編

十字架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月村と神風と夜の一族と 番外編

【コード】

N2954Q

【作者名】

十字架

【あらすじ】

月村と神風と夜の一族との番外編になります

なのは、フエイト、ハヤテとの再開

京とすずかが付き合い始めてしばらくがたったころ・・・

す 「京くん、あのね親友から明日こつちに帰ってくるって連絡があつただけど、京くんも来てくれない？」

京 「俺も？別に構わないけど、いきなり行っても大丈夫か？」

す 「うん 一人はなのはちゃんだしね」

京 「なるほどね、それで？親友には俺のことを紹介しときたいと？」

す 「うん／＼／＼／＼／＼／＼／」

京 「わかった、俺も久しぶりになのはに会いたいしな」

す 「む・・・」

京 「どうしたんだ？」

す 「私よりなのはちゃんの方がいいんだ・・・」

京 「は？」

す 「別にいいもん・・・寂しくないもん」

京 「何を言ってるんだ？すずか？」

す 「うーん、後5分・・・すー」

京 「今起きるならもれなく俺の手料理と血液がついてくるけど?」

す 「おはよう京くん!! 今日もいい天気だね!!!!!!!!」

京 「起きたならさっさと服着て飯食え」

す 「京くん・・・その前に・・・」

京 「ん?」

チュツ

す 「えへへおはようのチュウだよ//////////」

京 「まったく//////////」

す 「さて、用意してなのはちゃん達を迎えに行きますか!」

京 「だな」

翡翠屋・・・・・・・・

カランカラン

士 「いらっしやい、すずかちゃん、京」

桃 「二人ともいらっしやい」

京 「おはようございます、なのは達帰ってきてます?。」

士 「ああ、帰ってきてるよ、今は部屋に入るから上がるという」

す 「はい!お邪魔します」

京 「お邪魔します」

な 「あーすずかちゃん!」

す 「なのはちゃん!みんな!久しぶりー!」

フ 「うん、久しぶりだねすずか」

は 「せやなあ、こちらがミッドに行ってからやからだいぶ立っなあ
あ」

す 「そうだねえ、シグナムさん達は?」

は 「後から来るよ、そ・れ・よ・り・も!」

す 「ん?どうしたの?」

は 「後の男の子は誰かなあ、すずかちゃん」

す 「あ／／紹介するね／／その／／私の彼氏の神風京君・
」

な 「あー!京君久しぶりー!」

京 「久しぶりだな、なのは」

な 「うん！京君と会うのはいつ以来かな？」

京 「俺が引越す前に会ったきりだから大分前だな」

な 「うん！それにしてもびっくりしたよ！！」

京 「それよりも、お二人さんの紹介してくれないか？」

フ 「フェイト・テストロッサ・ハラオウンです、よろしく」

は 「八神はやてです、よろしく」

京 「神風京だよろしくな、”魔導師諸君”」

な、フ、は 「！！」

京 「ん？どうしたんだ？」

な 「京君・・・すずかちゃんに聞いたの？」

京 「いや、聞いてないぞ」

す 「う・・・うん、私話してないよ」

は 「あんた・・・何者や？」

京 「なに、ただの高校生だよ」

フ 「ただの高校生が何で私たちの事を知ってるの？」

京 「ふむ、クロノに通信を繋いでくれないか？」

フ 「クロノの事まで知ってるんだね、ちょっと待って、今繋ぐから」

ク 「どうかしたのかい？フェイト？」

フ 「うん、民間人が私たちの事を知ってたんだけどね、クロノに通信を繋いでくれて言われて」

ク 「そうか、それで？その相手は？」

京 「俺だ」

ク 「な!!!あなたは!!!!」

京 「久しぶりだな、クロスケ」

ク 「その名で呼ばないでくださいよ京さん」

フ 「クロノ、知ってるの？」

ク 「ああこの人こそ最年少魔導師だった神凧京さんだ」

京 「懐かしいなあ」

は 「それで？何者なんや？」

ク 「彼は当時の最年少中将だった少年で魔導師ランクがSSSSランクだったんだ」

「」「」「」
「うそおおおおおお」
「」「」

あかされる過去(前書き)

ちよつとだけシリアス・・・

あかされる過去

ク 「それにしても、お久しぶりですね。京さん」

京 「だな。俺が局を辞めて以来か？」

ク 「ですね、今まで何を為さってたんですか？」

京 「なに、普通の一般人として暮らしてきたさ」

ク 「そうだったんですか、それにしてもまさかなのは知り合いましたとは……なのはリンカーコアがあることはご存知だったのですか？」

京 「もちろん、いつかはこうなると思ってたさ」

ク 「ジュエルシード、闇の書事件の事はご存知ですか？」

京 「ああ、知ってるさ。何せこの世界であれだけの魔力を発してたんだ、気付かないほど落ちぶれていなさ」

ク 「でしょうね……………一応聞きますが局に戻るつもりは？」

京 「ないな」

ク 「キツパリ言いますね……………やはりあの事件が原因ですか？」

京 「まあそれもあるが一番の理由は……………」

ク 「理由は…………？」

京 「めんどくさくなったからだ」

ク 「やはり……………貴方という人は……………」

京 「だが決心したのはあの事件だな、あの時ほど自分の無力さを呪ったことはない……………」

ク 「……………」

京 「お前が気にすることじゃない、あの時は俺も、お前も子供だ

「ただだから……」

ク 「ですが!」

京 「くどい!!これ以上言うならお前が何歳までおねs」わー
「……!!!」わかったか?

ク 「わかりましたから、脅すのだけはやめてください……」
「

京 「ふふふ……それよりもリンさんは元気か?」

ク 「ええ、今も変わらず元気すぎて逆に困ってますよ」

京 「そうか……あの人も若く無いのだから早く引退すればいいものを……」

ク 「確かに……あれでもう結構な年ね」何か言ったかしら?クロノ?」20代にしか見れないほど若々しいでございます……
「……リンディ艦長」

リ 「そう?ありがとう、クロノ」

京 「……………オレハキュウヨウガアルノデコレデ……………」

リ 「あら？こんなところにアルバムが……………」

京 「お久しぶりです！！リンディさん！！！！相変わらずお美しいでございます！！！！！！！！！！」

リ 「ありがとうね、京ちゃん。」

フ 「リンディ母さんもこの人の事知ってるんですか？」

リ 「ええ、知ってるわよ。何せ元私達の上官ですから」

な、フ、は 「……………へ？」

ク 「京は元々僕達の上官でね、いろいろと無茶をしてくれた厄介なお人だよ」

フ 「そうだったんだ……………でも何で局を辞めちゃったの？」

ク 「……………まあいろいろあつあんだよ」

京 「そういうことだ、知りたいなら簡単にして話してやるが？」

な 「教えてくれるかな？京君」

す 「うん。私も京くんの過去知りたい……」

京 「ふむ、ならめんどごうだから簡単に話すぞ？俺が局を辞めた理由はな……………管理局に両親を殺されたからだ」

す 「え？殺……………された？」

な 「おじさんと……………おばさんが？」

は 「管理局がそんなことするはず無いやろ！悪口もいい加減に……………」

ク 「はやて！……………！」

は「ク……クロノ君？」

ク「事実だ……管理局は……京さんの力を恐れて両親を人質にとつて京さんを脅迫していたんだ……」

な「う……嘘……」

フ「まさか……本当に……?」

京「ああ、本当だ。そして俺は両親が殺された事実を知り……その犯人を……」

は「まさか……殺したんか……?」

京「いや、殺そうかと思つたが拉致、監禁して痛めつけて更に死なないように回復魔法をかけて更に痛めつけた……そして管理局に引渡し今も牢獄の中で俺のかけた幻術によつて何回も殺される幻を見せている」

ク「そして京さんは局を辞め元いた世界へ帰つて行つた、その時の京さんの姿を見た局員が付けた2つ名が……黒き破滅の神」

リ 「あだ名の由来は彼の魔力光とその時の姿が何もかもを破壊しようとしていた神のように見えたかららしいわ」

京 「まあ俺の過去はこんな感じだな、詳細は出来れば話たくないのにな。思い出ただけで暴れたくなる」

す 「まさか京くんにそんな悲惨な過去があつたなんて・・・」

は 「なんでや！何で管理局はそんなことしたんや？！正義掲げてるんやないんか！！」

フ 「そうだね、今の話で局を信頼していいのかわからなくなった・・・」

京 「あー、安心しろ、今の局にそんなことするやつはいないからさ」

は 「何でそんなこと言い切れるんや？」

京 「俺が辞める前にゴミ掃除をしたからだ」

な 「ゴミ掃除・・・？」

京 「ああ、ちなみに言うとな。プレシア・テストロッサを誘惑したのは管理局だ。そして夜天の書を改悪し、闇の書にしたのも管理局だ」

フ、は 「！！」

ク 「そんな・・・何故教えてくれなかったのですか?!」

京 「教えたらお前は局に反旗を翻しただろ？」

ク 「当たり前です！」

京 「だから言わなかったのさ」

ク 「だからって!」

京 「俺が教えなかったのには理由があるんだよ・・・」

ク 「理由……ですか？」

京 「俺のレアスキル……Creative 創造 の力は知ってるだろ？その時に森羅万象を創造したことがあってな、これから起こることを俺は見た……そしてなのは達がクロノと出会いそして局員の仕事に誇りを持てるようになっていたのを見たんだ……お前が……リンデイさんがいるなら局は生まれ変われると信じた、だから俺は局を抜けお前達に未来を托そうと思った」

ク 「そうだったんですか……」

リ 「そこまで信頼されちゃ実現させないとね！」

な 「うん！私も頑張るよ！！頑張つて局が……みんながそんなことしなくていいようにして見せるよ！！」

は、フ 「私も……！(うちもや……)！」

京 「ありがとう……」

す 「京くん……」

京 「すずか……？」

す 「だから最初に会ったときに悲しそうな目をしてたんだね・・・」

京 「！！見抜かれてたか・・・」

す 「でも、もうあんな目はさせないよ！私が京くんを幸せにしてみせるから！！」

京 「すずか・・・ありがとう・・・本当に・・・ありがとう」

士 「話は済んだかな？」

京 「士郎さん・・・」

士 「みんなに話してすこしは楽になつたかい？」

京 「はい・・・やっと吹っ切れそうです！」

士 「そうか・・・それは良かった・・・甘えなければいつでも家に来るといい、あいつの変わりにはなれないが、父親代わりには慣

れるからね」

桃 「そうよ、京くん」

京 「桃子さん・・・」

桃 「いつでもお義母さんって呼んでね！」

京 「ちょ、桃子さん！それ字が違うから！！」

桃 「あら？そんなことないでしょ？昔はなのはは僕のお嫁さんにするんだーとか言ってたくせに」

す 「へえ・・・そうだったんだ・・・京くんの初恋の相手はなのはちゃんだったんだ・・・」

京 「待て！すずか！昔のことだ！！子供のころの戯言だろ？！」

す 「ふふふ・・・京くん・・・OHANASHI・・・しようか？」

京 「ヒッ!」めんなさい!」

す 「ふふふ・・・」

士 「・・・桃子・・・さすがにあれはまずくないか?」

な 「あはは、確かにあれはダメだと思っの・・・」

フ 「OHANASHI・・・砲撃・・・SLB・・・」ガタガタ

は 「ちょっとフェイトちゃん?!どないしたん?!」

ク 「トラウマが蘇ったか・・・」

す 「覚悟はいいかな?京くん?」

京 「出来てません!」

リ 「すずかちゃん」

す 「?なんですか?リンディさん?」

リ 「実は京君ね、最後に私と一緒に風呂に入った時に×××が×××して×××を×××あげたらそのまま果てちゃったのよ」

京 「リンディさーーーーーん!!!!!!」

す 「へえ・・・ふーん・・・ほーう・・・そうなんだ・・・」

京 「バンドかけて無理やって来たのは貴女でしょうが!」

リ 「あら?そうだったかしら?」

京 「リンディさ」「京くんの・・・京くんの・・・」す・・・す
か?」

す 「バカーーーーー!」

ガシッ!ドカッ!バキッ!グサッ!プチッ!

す 「はあはあ」

な 「あはは〜京くん・・・生きてる?」

フ 「さすがにこれで生きてたら人間じゃ・・・ないよ?」

は 「ははは〜これは流石にやりすぎちゃうか?」

ク 「なに、問題ないさ。」

フ 「でも・・・」

京 「し・・・死ぬかと思った・・・」

「「生きてた!!」「」

ク 「京さんは不死身と言われるほど打たれ強いからな・・・最後のプチッは流石に焦ったが」

京 「ギャク補正って・・・最強だな?!」

あかされる過去（後書き）

ちよつとだけ過去を書きました！感想や注意点などがあればどんどん言ってください！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2954q/>

月村と神凧と夜の一族と 番外編

2011年1月26日06時59分発行